

「ワレサ 連帯の男」 ★★★

2014（平成26）年5月6日鑑賞

<テアトル梅田>

監督：アンジェイ・ワイダ

脚本：ヤヌシュ・グヴォヴァツキ

レフ・ワレサ（電気工、「連帯」委員長）／ロベルト・ヴィエンツキエヴィチ

ダヌタ・ワレサ（レフ・ワレサの妻）／アグニエシュカ・グロホフスカ

オリアナ・ファラチ（イタリア人の女性ジャーナリスト）／マリア・ロザリア・オマジオ

ファラチの通訳／ジョバンニ・パンピグリオネ

クレメンス・グニエフ（造船所所長）／ミロスワフ・バカ

神父／マチェイ・シュトゥル

ナヴィシラク（公安局員）／ズビグニエフ・ザマホフスキ

マイフシャク（公安局員）／ツェザリイ・コシンスキ

2013年・ポーランド映画・124分

配給／アルパトロス・フィルム

<ドキュメンタリーでも、伝記映画でもないが・・・>

労働組合の委員長として有名になった人物は日本にもたくさんいる。しかし、ポーランドの独立自主管理労働組合「連帯」のレフ・ワレサほど有名な委員長はいない。ポーランドのグダンスク造船所（旧レーニン造船所）の電気技師として働いていた彼は、「連帯」の委員長として政府とタフな交渉をこなす中で頭角を現わし、多くの要求を認めさせた。ポーランドの総人口3800万人のうち1000万人の労働者が「連帯」に加盟したというから、すごい。

彼は、①1981年12月の「戒厳令」の布告によって軟禁されたが、②82年11月にソ連のブレジネフ書記長の死亡に伴って軟禁を解かれた後、③83年10月にはノーベル平和賞を受賞。さらに④89年6月の自由選挙で「連帯」が圧勝し、⑤89年11月9日にベルリンの壁が崩壊した後の⑥90年11月25日の大統領選挙で当選し、⑦12月22日大統領に就任した。

ワレサの友人であり、81年にワレサが軟禁される中、自分自身もポーランド映画協会会長の座を追われるという迫害を受けたアンジェイ・ワイダ監督が、そんなワレサと「連帯」に焦点を当てて本作を監督した。

本作はドキュメンタリー映画でもなければ、ワレサを称賛するための伝記映画でもなく、ワレサの人間性を描くもの。しかし、いくらアンジェイ・ワイダ監督の手腕によっても、「この手の映画」はどうしてもそうになってしまう傾向がある。したがって、本作は伝記映画的な面を含めてそれなりに興味深い映画だが、映画の出来としてはイマイチ・・・。

<絶頂期以降のワレサは・・・？>

「貧乏人の子だくさん」というのは日本でもポーランドでも同じらしい。映画冒頭の1980年、ワレサが「連帯」を率いて闘争に入った時に第一子を妊娠中だった妻のダヌタ・ワレサ（アグニエシュカ・グロホフスカ）は、1989年11月にワレサが米国議会で演説する頃には、6人の子持ちになっていた。本作はイタリア人ジャーナリストのオリアナ・ファラチ（マリア・ロザリア・オマジオ）がワレサに対して行う「インタビュー」を中心に構成されているが、そこに見るワレサはよくしゃべるし、きわめてフランクだが、同時に頑固さも垣間見える。また、自分で自分の能力や魅力についても十分自覚しているようだ。

意外なことに、「連帯」の支持者であり、ワレサの親友であったアンジェイ・ワイダ監督は、ワレサが1990年12月に大統領に就任し、「連帯」が分裂した後はワレサとたもとを分かったそうだが、それは本作では一切描かれていない。また、ワレサは大の日本ファンで、1981年5月に初来日、大統領就任時の1994年には国賓として来日し、「ポーランドを第2の日本に！」と叫んだそうだが、本作にはそんなストーリーも全く描かれていない。さらに、「連帯」の分裂後、1995年の2回目の大統領選挙に立候補したワレサは対立候補のクファシニエフスキ元大統領に僅差で敗れた。また、ワレサは2000年の大統領選挙にも立候補したが、1%にも満たない得票で惨敗した。しかして、そのようなストーリーも本作では全く描かれていない。つまり、アンジェイ・ワイダ監督は本作をワレサの絶頂期の姿で終わらせたわけだが、それは一体なぜ？

<ポーランドだけでなく、ウクライナの情勢も>

1939年9月1日のナチス・ドイツによるポーランドへの侵攻から第2次世界大戦が始まったが、その後ポーランドがいかに苦難の歴史を歩んで来たかは、アンジェイ・ワイダ監督の『カティンの森』（07年）等を観れば明らかだ（『シネマルーム24』44頁参照）。2014年5月の今、南シナ海のパラセル（西沙）諸島付近で中国が石油掘削作業を始めたことを巡って、ベトナムの艦船と中国の艦船によるにらみ合いが続いている。これはこれで大変な事態だが、それ以上に今世界の注目を集めているのが、ロシアによるクリミア半島併合に続くウクライナ情勢だ。東はロシア（ソ連）、西はヨーロッパ諸国の間に位置するウクライナは、ポーランドと同じようにさまざまな苦難の歴史を歩んできたが、親ロシア派の（武装）住民VSウクライナ政府軍の小ぜり合い、軍事衝突が拡大し、ロシアの軍事介入を招くようなことになれば・・・。

そんなチョー現実的な危険が迫っている現在、1980～90年代にポーランドでとてつもないことをやり遂げた男、ワレサの偉業を確認することは大いに意義があるだろう。しかし、言ってみれば、ソ連の大改革「ペレストロイカ」を押し進めた元ソ連共産党の書記長ゴルバチョフや、2001年4月から5年半にわたって日本の構造改革を押し進めた小泉純一郎元総理と同じように、ワレサも所詮過去の人物。今、本作を観たからと言って、何かが変わるとは到底思えない。私が変に納得したのは、大阪市の橋下徹市長や大阪維新の会、日本維新の会の絶頂期は、まさに本作で描かれたワレサと「連帯」の絶頂期のようなものだったが、今やその落日ぶりは、本作に描かれなかったワレサと「連帯」のそれと全く同じということだ。

そこで、あえてもう一度くり返せば、本作は勉強のネタとしては十分価値があるが、映画の出来としてはイマイチ・・・。